アーサー・モリスンの
イースト・エンド三部作（Ⅱ）
――〈普通の人々〉の多様性――

青　木　　剛

1. 階層の細分化

1891 年に発表された「ある通り（‘A Street’）」において，スラムの住民でも大通りの商人でもないイースト・エンドの〈普通の人々〉に注目したモリスンは，やがて三部作の一冊目となる『みすぼらしい通りの物語（*Tales of Mean Streets*）』（1894 年）に収録される短編小説を書くきっかけを批評家のW・E・ヘンリー（W. E. Henley, 1849–1903）によって与えられる。当時『ナショナル・オブザーヴァー』の編集長を務めていたヘンリーがモリスンのスケッチに目をとめ，イースト・エンドの〈普通の人々〉を題材とする短編小説の連載を依頼したのである。『みすぼらしい通りの物語』は，「ある通り」に加筆したものを序文とし，『ナショナル・オブザーヴァー』に連載された十編の短編小説に，他の雑誌に発表された二編と書下ろし一編を加えて出版された。

前回論じたように，1891 年と 1894 年の「ある通り」との間の相違には，モリスンが十三編の短編小説を書いた三年間で得た〈普通の人々〉に対する認識の深化が反映されている。その中でも重要なのが，イースト・エンドにも階層の細分化が見られ，そこに暮らす人々自身，細分化された階層を意識しながら行動していることだ。まず，『みすぼらしい通りの物語』に登場する主要な人

物が属する階層を確認しておこう。

「ある通り」では，イースト・エンドの平均的な住民は「ドックか，ガス製造工場か，テムズ川に面した残り少なくなった造船所のどこかに勤めている」とされる。『みすぼらしい通りの物語』の登場人物の多くが，こうした階層に属することは確かだが，その中でも比較的収入が高い技能労働者，特に造船所に勤める職工が目立っている。最も高い階層に属するのは，「ガラス覆いの向こう側（‘Behind the Shade’）」で「技能工の中の貴族」とされる造船技師（shipwright）の未亡人と娘である。「商売（‘In Business’）」では夫は造船所の鋳型工，妻は作業時間記録係の娘，「すべての家屋敷（‘All That Messuage’）」では夫が旋盤工だ。造船所以外でも，「あの野蛮人のシモンズ（‘That Brute Simmons’）」の主人公は「大工兼指物師」であり，「一文無し（‘Without Visible Means’）」に登場する三人の失業者の一人は「ズックの道具入れ」を持って職探しをする。このように技能工の割合が高いのは，モリスンの出発点がイースト・エンドをスラムと同一視する言説を脱神話化することにあり，個人的にも父が造船所の蒸気機関の組立工であったことと無関係ではないだろう。

『みすぼらしい通りの物語』にはドックの荷役人夫やガス製造工場の労働者は登場しないが，同様の肉体労働に従事するものとしては，「ナパー殿（‘Squire Napper’）」の舗装工や，「赤毛牛グループ（‘The Red Cow Group’）」で市場の荷役作業やブックメーカーの使い走りをする男たちを挙げることができる。「三ラウンド（‘Three Rounds’）」の「日雇い仕事」では食えず，職業的なボクサーになることを夢見る青年は下の階層とのボーダーラインにあると言えるだろう。

1894 年の「ある通り」の加筆部分に現れた〈ある通り〉とスラムの間に存在する二つ階層は「ライザラント（‘Lizerunt’）」に登場する。というより，おそらく加筆はこの作品のために行われたものだろう。〈ある通り〉の一つ下の階層に属するのが，「洗濯物のしわ伸ばし（mangling）」をするビルの母で

あり，やがてビルの妻となる「ピクルス工場」勤めのライザがスラムに最も近い階層である。二人の結婚式が行われた時，ライザの母は飲酒暴行で一カ月の懲役に服している。明らかに家並みが〈ある通り〉より下の階層に属することを示しているのが「階段で（‘On the Stairs’）」である。窓にはひびが入り，戸口に座った女たちが世間話をし，〈ある通り〉では一家族が二部屋を占めているのに対して，ここでは一軒に八家族が暮らす。ただし，モリスンは「それにもかかわらず，それはスラムではなかった」と書く。主人公のカーティス夫人が亡くなった息子のために立派な葬式をあげようとすることが示すように，その住民にはまだ世間体を気にするある種の余裕が残っているからだろう。たとえ，その葬式の費用に，息子の「刺激剤」としてポートワインを買うように医者と医者の助手から施された金が使われるとしても。

2.〈普通の人々〉の階層意識

『みすぼらしい通りの物語』では，このように細分化された階層を背負った住民たちの相互関係が重要なモチーフの一つとなる。モリスンが描くイースト・エンドの住民は，階層的な差異に敏感で，しばしば激しい反応を示す。平均的な所得が低い地域にあっては，小さな差が大きな意味を持つからである。

「ナパー殿」では，自分たちの階層から抜け出そうとする者に対する羨望とねたみが描かれる。キャニング・タウンに住む舗装工のビル・ナパーは，オーストラリアに渡って一財産を築いた兄から 300 ポンドの遺産を相続するが，そのうわさはたちまちキャニング・タウンに広まり，遺産の金額は途方もないものに膨張してゆく。「偉ぶる」つもりはないとキャニング・タウンにとどまり，気前よく酒をおごるナパーは，弁護士からの手紙に ‘W. Napper, Esq.’ とあったことから ‘Squire Napper’ とおだてられる。その一方で，「おしゃれな地区」に移りたいという思いが入れられず，高価な衣服や装飾品を身に着けることに

満足を見出した妻は周囲の女たちの反感を買うことになる。

> 誰もが彼女に対して友好的であったわけではなく，彼女の気取った態度が気に入らない隣人に，帽子を頭からむしり取られたことがあった。（Morrison 1894, p. 238）

ヴィクトリア時代の小説でしばしば描かれる裕福な者に対する嫉妬は中産階級に限られたものではなく，むしろ，まとまった富を手にすることが難しいイースト・エンドではより激しい形で現れるのである。

そして，住民から自分たちとは決定的な違いがあると認識された者は孤立へと追いやられる。「ガラス覆いの向こう側」の舞台となるのは，両側に三階建てのテラス・ハウスが並ぶ「イースト・エンドのどこにでもある通り」だが，通りの外れに小さな一軒家があり，そこに未亡人とその娘が越してくる。

> さて，一軒の家を自分たちだけで占有し，それを清潔に保ち，戸口につっ立っていることもなく，裏の垣根越しに世間話をしたりすることもなく，正面の窓にはいつも塵が払われたガラス覆いに入った蝋細工の果物が置かれ，しかも，そこに住んでいるのが自分たちの職業を誰にも明かさない二人の女性であるとすれば，その人たちはたちまち金持ちだと判断が下され，そうした状況にふさわしい悪意と尊敬をもって扱われ，その一挙手一投足が注目されることになる。（p. 116）

パーキンズ夫人は商人の娘で，亡夫は帆船時代の造船技師として羽振りが良い時期があり，中産階級に近い生活を経験したことがあることは確かだが，この通りに住まなくてはならないこと自体がすでに家計が傾いていることを示している。しかし，住民たちは自分たちとの差異にばかりに目を奪われ，未亡人親

子の実情を想像することができない。

だが，住民たちの冷たい視線が届かないところで，親子の悲劇は進行してゆく。母親が行っていた商人の娘相手の学校が失敗し，娘がピアノの個人レッスンを始めると，「それはパーキンズ家には，他のものが持っていないピアノがあると宣伝すること」としかみなされない。やがて，ピアノが売られ，娘が近所で買物をする姿が見られなくなった時にも，「鼻持ちならない付き合いの悪さ」が非難されるばかりである。娘が内職として安物のシャツの縫製を行っていることが知れると，それは自分たちの生活を脅かす行為だと住民の一人が抗議する。

> そのニュースはたちまち通りに広がり，このように物持ちが持たざる者の口からパンを奪うことは前代未聞の恥ずべきことであり，ただちに止めさせなければならないと意見が一致した。（p. 121）

すでに前回示したように，モリスンは，「ある通り」において，イースト・エンドでは階層ごとに女性に許される職業について暗黙の了解が存在することを指摘している。そうした暗黙の了解は，需要に対する供給が圧倒的に少ない労働市場において調整機能を果たしていた面があり，「ガラス覆いの向こう側」の住民たちは当然の権利を主張しているにすぎないとも言える。いずれにせよ，最後には，未亡人と娘は，家具から衣服まで一切の家財が売り払われた家の中で，ボロと新聞紙に包まれて餓死しているのが発見される。ここでも住民たちは，残されたガラス覆いをかぶせた蝋細工が滞っていた二週間の分の家賃に見合うものかと心配するばかりである。

これとは反対に，〈ある通り〉の住民は，自分たちの下とみなされる者にあからさまな拒否感を示すことがある。「バウ橋へ（‘To Bow Bridge’）」は，不特定多数の人々が乗り込む乗合馬車を舞台にして，イースト・エンドに暮らす

さまざまな人々の関係性を巧みに描いたスケッチである。乗客の大部分は，週給を受け取る土曜日の夜を楽しむ酔客だ。男たちが大騒ぎの挙句，喧嘩を始める中，女たちにも大声で話したり歌ったりするものもいれば，席に割り込んで眠りこけるものもいる。労働者階級におけるアルコール消費の広がりを描いている点でチャールズ・ディケンズの「ジン・ショップ」を思い出させる作品だが，モリスンは酔客以外の乗客も登場させる。早めに馬車に乗り，奥の席に着いて騒ぎを避けようとする語り手である「私」,「静かな職工」,「包みとバスケットとキャベツを持った真面目そうな子連れの女」にとって，酔客は歓迎されざる隣人である。特に，子供連れの女は，隣に座った売春婦に話しかけられても終始無視することに徹する。モリスンが売春婦を描くことは稀だが,『ジェイゴウの子供』のポルと同様，この売春婦は子供に優しく，小遣いをやっても良いかと許可を求めるが，母親は顔をそむけて答えようとしない。「真面目そうな子連れの女」と売春婦はイースト・エンドという生活圏を共有していても，両者の間には乗り越えられない社会的な壁が存在するのである。

3. 上昇志向と「無知」

「バウ橋へ」のようなスケッチ的な作品を除いて,『みすぼらしい通りの物語』に収められた短編小説の大半が挫折や転落の物語である。その背景には，イースト・エンドの人々は変わりえないというモリスンの深いペシミズムがあるが(Keating 1971, p. 169)，挫折や転落の要因は作品によってさまざまである。

その一つは，〈ある通り〉の住民に内在する要因だ。「商売」では，多くの造船所があったテムズ川沿いのキュービット・タウンに住み，そこの造船所の一つで鋳型工を務めるテッド・マンシーが，パブを営業していた伯父から 100 ポンドを相続する。造船所の作業時間記録係の娘だった妻が主導権を握るマンシー家は，イースト・エンドの商業地区の一つだったブロムリーに移り，「上品

(genteel)」だからという理由で衣料品店を始める。しかし，ほとんど客が来ない日々が続き，〈商売〉はたちまち破綻する。

この夫婦の挫折が，〈商売〉の経験や知識がないことによることは明らかだ。というより，無知だからこそ，多くもない元手で無謀な冒険に乗り出したのである。

> 100 ポンドの使い道が，商売，つまり店を始め，鋳型工と商売人を距てる何段もの階段をひとっ飛びに駆け上がり，社会的な地位を高めることにあることは疑問の余地がなかった。それで，マンシー家の人々はただちに商売を始めた。どの商売についてもまったく無知だったので，好きなものを勝手に選べば良かった。(p. 157)

そして，妻の無知によって始まった商売は，夫の無知によって予想外の結末を迎える。造船所をやめて店を手伝っていた夫は，最後の解決策として，負債はすべて自分が負い，残った財産はすべて妻に譲渡する旨を間違いだらけの綴りと文法でつづった「法律文書（legle dockerment)」を置いて家を出る。これが法律的に有効な文書であるかどうかは別にして，負債が無くなったからといって在庫品が売れるようになるはずがなく，夫が残した銀の時計と指輪では新たな商品の仕入れはおろか，妻と二人の娘の生活費にも足りない。夫の近視眼的な自己犠牲は，かえって残された家族を路頭に迷わせる結果に終わるのである。

モリスンは，イースト・エンドにおける「上昇志向」の不毛さを論じた「ある通り」の一節を次のような激しい調子で結んでいる。

> というのは，無知は，ここの［ある通り］の住民の避けられない運命であるからだ。彼らは何も見ず，何も読まず，何も考えない。(p. 25)

モリスンの言う「無知」は，読み書きなどの基礎的な教育の欠如や，「劇場」，「詩やロマンス」，「ペニー小説」などの教養に対する無関心に留まらない。それは〈ある通り〉の特徴とされる「単調さ（monotony）」（p. 16）に関係した生きる姿勢の問題である。モリスンは，〈ある通り〉の住民は，卑近な日常的な営みを毎日，毎週繰り返しているにすぎないとする。狭い日常的な世界に埋没しているために，「この通りでは，外の世界の出来事が人々の注意をひくことがない」。したがって，自分たちが住む地域で起きるストライキを別にして，「党派の対立，戦争や戦争の噂，公の祝い事」には関心がない。弟や妹の子守りしながら買物に出掛けた少女は，「ベーコンの値段を，人間が考えるべき最も重要なものとみなしている」。このような〈ある通り〉の住民にとって，商売や法律も「外の世界」に属するものである。この意味で，「商売」は，思いがけない遺産によって「外の世界」に踏み込んでしまった者たちの挫折の物語と言える。

これに対して，「すべての家屋敷」では無知とは言い切れない計画性を持って老後に備える夫婦が描かれるが，ここでもモリスンはその計画を挫折させずにはおかない。造船所の旋盤工を務めるジャック・ランダルは，家を一軒購入し，退職後はそこから得られる家賃で生活する計画を立てる。モリスンは，詳細な数字を挙げながら，その一見完璧な計画を説明してゆく。最初に必要となる費用は，家の購入代金 220 ポンドと，印紙代と弁護士費用の 10 ポンドで，合計 230 ポンドになる。自己資金が 30 ポンドあり，残りは購入する家を担保に住宅金融組合（building society）からの融資を当てる。返済は 12 年間毎月 2 ポンド 4 シリング。購入するのは家だけで土地は含まれないから，年 3 ポンドの地代を払うことが必要で，毎年支払うべき金額は 27 ポンド 4 シリングとなる。これに対して，家賃収入は週 9 シリング，年 23 ポンド 8 シリングになり，差引き 3 ポンド 16 シリングが不足する。しかし，それは週 18 ペンスにすぎず，節約すれば容易に捻出できる金額だ。そして，12 年の返済が終われ

ば，家賃から地代を引いた年 20 ポンド余りの金が，贅沢はできないが何不自由ない老後の生活を保障してくれるはずだった。

しかし，夫婦は「各種税金と家の修繕費を完全に忘れて」いた。さらに，計画が成就するには，旋盤工としての賃金と家賃収入が滞りなく入ってくることが前提となる。モリスンは，この前提を一人の労働運動家を登場させることによって打ち砕く。ランダルの家を借りた労働運動家は家賃を踏み倒した上，労働者を扇動してしつこく家賃を求めるランダルに暴行を加えさせるのである。重傷を負ったランダルは造船所での職を失い，家を差し押さえられ，自己資金の 30 ポンドも戻ってこずに，救貧院に入る。現在の読者は労働運動家によってランダルの生活設計が挫折してゆく過程に不自然さを感じるかもしれないが，次章で示すように，労働運動を社会的脅威とみなすモリスンにとって，それはあらゆる企てが失敗することを運命づけられたイースト・エンドの不条理を象徴するものなのだ。

ところで，単調な日常生活への埋没とは，言い換えれば，〈ある通り〉の住民たちは変化しえないということだが，『みすぼらしい通りの物語』にはこれを物語の展開に応用したものがある。その典型的なものが「回心（‘A Conversion’）」だ。主人公の小泥棒は，ふと立ち寄った非国教徒の集会所で，伝道師の熱狂的な説教によって「感情のオルガズム」を経験するが，表に出た途端，松葉杖で体を支えながら豚の足を売る老婆からわずかな売上げを奪う。イースト・エンドにおける布教活動や慈善行為に懐疑的なモリスンらしい結末だが，伝道師の側から見た布教の失敗は，小泥棒の側から見れば変化しえなかったということにすぎない。

すでに触れた「ナパー殿」も，変化しえない人々の物語の変形と見ることができる。300 ポンドの遺産を受け取ったナパーが最初にすることは，パブの閉店時間や休業日を気にせずいつでも飲めるようにとビールを一樽買うことだ。妻には高価な衣装や装飾品を，娘にはピアノを買い与えることはするは，自分

自身はベッドの上で新聞を広げ，ビールとパイプ煙草を楽しめる「特上の日曜日」が続けば十分だった。投資や商売についても考えないわけではないが，面倒なことはしたくない。それは，遺産相続を担当した弁護士を最初から詐欺師と決めつけ，小切手や手形が信用できずに 300 ポンドを金貨で受け取るナパーにとっては賢明な選択と言えるかもしれない。ナパーが望んだのは，自分が慣れ親しんだ生活の枠組の中で最大限の贅沢をすることだった。作品は，300 ポンドを使い果たしナパーが舗装工の仕事に戻ることを考えるところで終わる。遺産はまったく無駄に費やされたが，ナパーにとってはいつもの日常生活が再び始まるだけなのである。

4. 労働運動からスラムへ

イースト・エンドの人々に影響を与える唯一の「外の世界」の出来事とされるストライキは，モリスンにとって一部の労働者にしか恩恵をもたらさず，かえって他の多くの労働者から仕事と賃金を奪う社会的な脅威だった。「一文無し」は，次のような一節で始まる。

> ロンドン東部では，人々はぶらぶらしているか，通りを行進しているか，待ち伏せて殴っているか，食べ物が無くなった台所でわめいているかのどれかだった。大ストライキが荒れ狂う秋だからである。ある一団の男たちは，十分な準備をし，ストライキをするよう命じられて，ストライキをした。他の小さな一団の男たちは，準備もないまま，共感を示すためにストライキをするよう命じられて，ストライキをした。さらに別の一団は，流行だからとストライキをするよう命じられて，ストライキをした。そして，他の業種におけるストライキのために仕事を失い，多くの労働者が解雇された。（p. 65）

有力な労働組合に属する人々は，組合からのスト手当やカンパによって，飢えることなくストライキが行うことができる。しかし，「一文無し」に登場する三人の労働者は，「他の業種」のストライキのために失業し，家族をロンドンに残し，職を求めてイングランド北部へ向かわねばならない。

モリスンが『みすぼらしい通りの物語』を書いた 3 年間は，1889 年のドック労働者のストライキの成功によってイースト・エンドの労働組合運動が拡大していった時期と重なっている（Inwood 1998, pp. 635–36）。したがって，モリスンがストライキや労働活動家を大きく取り上げていることに不思議はないが，その扱い方は極めて特異だ。この短編小説集で描かれる労働運動に携わる者たちは，例外なく，他の労働者の犠牲の上に自己の利益をはかるペテン師として戯画化されるのである。すでに触れた作品について言えば，「あらゆる家屋敷」で家賃を踏み倒し，労働者をけしかけて大家を襲撃させる労働活動家がそうだ。「ナパー殿」にも，1 時間 1 シリングで雇われ，「禁酒運動」から「労働者の権利」に至るあらゆるテーマについて求められた立場から演説する「雄弁家」が登場する。この辻演説家は自称ジャーナリストとともに新聞出版の話をナパーに持ちかけて遺産をだまし取ろうとするが，その意図を見抜かれて失敗する。

ここで注目されるのは，ナパーの「無知」が雄弁家に対しては一種の武器として機能していることだ。モリスンが描く労働運動家や辻演説家は，言葉を操って自己の利益のために他者を利用しようとするペテン師であるが，〈ある通り〉の住民の狭い世界観は，空疎な言葉を信じない現実感覚となって現れるのである。さらに，モリソンは，そうした言葉をもてあそぶ者たちに対して〈普通の人々〉に暴力で反撃させる。「あらゆる家屋敷」には，家賃の支払いを拒む労働運動家を夫が殴りつける場面がある。ナパーに計画を見抜かれた辻演説家は，夜陰にまぎれてナパーの家に忍び込み遺産を盗もうとするところを発見されて，見るからに頑丈そうなブーツの一撃を頭にくらう。モリスンの作品には，ボク

シングを含めて殴る行為を描いたものが少なくない。「三ラウンド」はボクシングで身を立てようとする青年の物語であり，『ジェイゴウの子供』にはスラムのグループ抗争をそれぞれの代表者の殴り合いで決着をつける場面がある。『ロンドン市街へ』の主人公の少年は，自ら働く意志がなく未亡人の母に寄生しようとする男をボクシングを習って打ちのめし，しかもその少年の行為は明らかに肯定的に描かれている。言葉が欺瞞的に利用されることがあるのに対して，殴るという行為は嘘のない直接的な意志表示である。モリスンの作品には家庭内暴力の場面も多く，そうしたものまで肯定的に描かれているということではないが，不正に対して言葉で対抗できない者たちの対抗手段として暴力が容認されていることは言えるだろう。

こうしたイースト・エンドの活動家の言葉の空疎さと〈普通の人々〉の現実感覚の対比が最も鮮明に現れているのが「赤毛牛グループ」である。この作品は，1894 年 2 月にグリニッジ天文台を爆破しようとした無政府主義者が爆死した事件のパロディーといえるもので，駆け出しの無政府主義者が，「赤毛牛(the Red Cow)」と呼ばれるパブにたむろする男たちを洗脳して，ガス製造所を爆破させようとする。「社会問題」など話題にしたことがない男たちは，初めのうちは無政府主義者の「講義」にも馬耳東風だが，爆弾製造の話には興味をかきたてられ，すぐさまガス製造所爆破の準備に取り掛かる。しかし，「指導者」である無政府主義者が実行には参加しないことを知ると，男たちは自分たちが利用されているにすぎないことに気づいて，復讐を企てる。決行の晩，男たちは無政府主義者をガスタンクの足に縛り付け，爆弾の導火線に火を付けてから逃げ出す。しかし，爆薬が仕込まれているはずの缶に入っていたのは爆竹で，無政府主義者は爆発音を聞いて駆け付けた警官に訳のわからないことを口走る酔っ払いとして逮捕されるのである。

「集会やデモ」に興味を示すもう一人の人物が「ライザラント」のビリーであるが，彼の場合は労働運動家や辻演説家とは決定的な違いがある。経済的に

他者に寄生する〈働かざる者〉である点は共通しているが，ビリーは寡黙であり，言葉よりも暴力によって母や妻から金を得ようとし，この点では『ジェイゴウの子供』に描かれるスラムの住人に近い。ただし，「ライザラント」に描かれる世界はスラムではない。すでに触れたように，ビリーの母は「洗濯物のしわのばし」をし，妻のライザは「ピクルス工場」に勤めていので，〈ある通り〉とスラムの間に位置する階層だ。ビリーが妻に売春を強要するところで作品が終わることを考えると，スラムとの境界線上にある人々がスラムへと転落してゆく物語と見るべきだろう。

実際，「ライザラント」は，作品の展開についても転落を強調する構成がとられている。30 ページを超える『みすぼらしい通りの物語』で最も長いこの作品は，3 章に分けられ，それぞれ「ライザの求婚」，「ライザの最初の子供」，「状況の変化」という章題が付けられる。これらの章題は，字義的にはビリーとライザの結婚，第一子の誕生，第三子の誕生と母の死という，どこにでもありうる人生の軌跡を表しているにすぎない。しかし，それは，貧困という状況と搾取者としてのビリーの存在のためにスラムへの転落物語へと変貌する。ビリーにとって，結婚はライザがピクルス工場から得る賃金を自分のものにすることであり，第一子の妊娠と誕生はライザの収入がなくなるだけでなく，さらに子供にかかる出費のために自分の収入が減ることを意味した。そして，ライザが三人の子供を抱えて勤めに出ることができない状況で母が亡くなることは，洗濯物のしわ伸ばしから得られるわずかな手間賃も失われ，収入源が完全に閉ざされることにほかならない。ビリーに考えられる唯一の打開策は，妻に売春を行わせることだった。

この先にあるのは『ジェイゴウの子供』に描かれるスラムの世界である。しかし，モリスンは『みすぼらしい通りの物語』においてスラムへの入り口を暗示してはいても，スラムを正面から取り上げることはしなかった。モリスンが『みすぼらしい通りの物語』で提示しようとしたのはイースト・エンドの「全

貌」ではなく，その中間層であり，その点では十分評価に値する作品と言えるだろう。

参考文献

Inwood, Stephen. 1998. *A History of London*. London : Macmillan.
Keating, P. J. 1971. *The Working-Classes in Victorian Fiction*. London : Routledge & Kegan Paul.
Morrison, Arthur. 1894. *Tales of Mean Streets*. London : Methuen.